



Friedrich Fröbel Quotes

40…ここに發育ざかりの、庭師の子供がいる。父は雑草を刈っている、そして子供もその手助けをする積りである。父は「水芹せりと旱芹おんたせりとの区別を」教えようとして、葉の光沢や香などに注意させている。一方にはまた、林務官が息子と連れ立って山の開墾地へ行く。そこは以前に、共同事業として樹木の種が蒔かれてあったのであるが、今やそれが発芽して一面青々となっている。子供はただ松の若芽ばかりあるものと考えるが、父は松の外に有毒タカトウダイの若芽もあるということに注意させ、そして二つの特色を区別することを教えるのである。(中略)またここに一人の鍛冶屋の子がいる。いまでも父親が槌をふるって赤熱した鉄を打つのをしている。そこで父は子供に向かって、熱は鉄を軟らかくするものであることを教え、またさきには容易に鉄の棒がはいった一つの穴へ、今度はこの棒を赤熱させて、入れて見ようとしてはいらないということを示しながら、熱は鉄を膨張させるものであると教えるのである。

—『人の教育』より—

フリードリッヒ・フリーベル

1782—1852

ドイツの教育家。世界初のキンダー・ガルテンの創設者。幼児の成長を植物の成長モデルにして『人の教育』を著したほか、幼児の創造的な活動を促すための玩具「恩物」を考案した。

解説

この40節は長い節で、大事なことがいくつも出てきます。今回はそれを大きく2つのテーマに分けて、来月と2回で紹介したいと思います。

今月の引用した箇所では、フリーベルは、幼い子どもたちが親の仕事を手伝う場面をたくさん描いています。引用部分はその一部で、もっとたくさんその仕事の手伝い場面を紹介しています。昔の子どもはこうして本当に多様な仕事を手伝っていたのだということがよく伝わってくる節です。銃の撃ち方まで出てきます。

フリーベルは、こうした仕事を手伝えることで「現在および将来どれほどの発達となるものか」と強調しているのですが、子どもはイヤイヤ仕事を手伝っているのではないと言います。そこに子どもなりの真剣勝負の世界があり、それができるようになることが大人の世界に入

る喜びであり、子どもの育ちにとっても大事な場になっていくと主張しているのです。おそらく現代の言い方では、自分が家族の役に立っているという実感の得られる場、役立ち感が手に入る大事な場ということも付け加わるでしょう。

仕事の手伝いが子どもの育ちにとって大事と言ったのは、その後のモンテッソーリ、そして新教育の理論家デュイイ等と共通しています。彼らもまた子どもを育てる活動として「仕事」を重視していました。学習と言わず、それさえ仕事と言っていたのです。

汐見稔幸 (しおみ としゆき)
東京大学名誉教授。白梅学園大学名誉学長。専門は教育学、教育人間学、育児学。臨床育児保育研究会等、現場の保育者を中心とした研究会を複数主宰。

小西貴士 (こにし たかし)
森の案内人 写真家。子どもたちと森で活動しながら、自然の営みと子どもの育ちを撮ることをライフワークとして取り組む。